

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Changes in the Politeness Level of Utterances and Social Factors: A Report from the Okazaki Survey on Honorifics

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳村, 裕, YANAGIMURA, Yu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000548

ことばの丁寧さの経年変化と社会的要因

——岡崎敬語調査から——

柳村 裕

国立国語研究所 時空間変異研究系 非常勤研究員

要旨

岡崎敬語の「丁寧さ」のレベルについて、第3次調査の結果を加えることで明らかになった敬語の大きな変化傾向を報告する。丁寧さが3回の調査を通して数十年にわたって増加し、特に第3次調査で大幅に増加したことが分かった。1940年代前後に生まれた人たちは、3度の調査の対象になったが、半世紀経って丁寧さを増やしている。「成人後習得 (late adoption)」が丁寧さでも認められた。これは実時間 (real time) による。一方、3回の調査すべてで、世代差という見かけの時間 (apparent time) で、中年層以上が丁寧で、若年層はぶっきらぼうという傾向が見られる。

また、場面による使い分けについては、依頼関係の有無という個人間の心理的關係に左右されるようになってきたことが読み取れた。

さらに、話者の社会的属性と丁寧さの関係については、どの時代においても、女性の丁寧さが高く、学歴が高いほど丁寧さが高いことが分かった。そして、これらの話者属性は丁寧さの経年変化とも密接に関わることが分かった。すなわち、丁寧さの増加を牽引するのは男性であり、また、学歴の高い話者の割合が増加する高学歴化によって、全体の丁寧さが増加したと解釈される*。

キーワード: 敬語, 丁寧さ, 言語変化, 話者属性, 場面

1. 導入

国立国語研究所では、愛知県岡崎市において、敬語の使用と敬語意識に関する大規模経年調査(岡崎敬語調査)を実施してきた。本稿では、岡崎敬語調査で得られた発話の丁寧さに関する新たな資料とその分析を提示する。具体的には、まず、岡崎市における発話の丁寧さが過去数十年にわたって増加傾向にあること、特に、第1次および第2次の調査結果に比べて、第3次調査で丁寧さが大幅に増加したことを示す。また、発話者の生年や性別などの属性による丁寧さの差異を示す。さらに、話者属性などの変数と丁寧さの経年変化の関係を検討する。例えば、性別という要因について言うと、男性と女性では丁寧さの経年変化の様相が異なる。性別、学歴、発話場面などの変数が、丁寧さの変化にどのように関わるかを示す。

1.1 岡崎敬語調査

岡崎敬語調査では、3回の調査が半世紀以上の期間にわたって行われた。第1次調査は1953年、

* 本研究は、2014年3月18日に国立国語研究所で開催された「大規模経年調査プロジェクト研究発表会」および2014年5月13日に国立国語研究所で開催された「第109回NINJALサロン」での口頭発表の内容を加筆・修正したものである。これらの発表時に有益なコメントを下された方々に感謝申し上げます。本研究は、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本語の大規模経年調査に関する総合的研究」(プロジェクトリーダー: 井上史雄, 2012年度~)の研究成果である。

第2次調査は1972年、そして第3次調査は2008年に実施された。各調査は、敬語行動を尋ねる調査や、敬語に関する意識を尋ねる調査、被調査者の社会的属性を尋ねる調査など、数多くの調査群で構成される。その中で、本稿で扱うのは敬語行動に関する調査の結果である。これは、被調査者に質問文や刺激図を提示して特定の場面を想定させ、その場面での敬語行動、すなわち被調査者の発話回答内容を尋ねる調査である。このようにして回答された発話情報は「反応文」と呼ばれる（具体例は2.2で示す）。

岡崎敬語調査の敬語行動を尋ねる調査の項目は、調査次ごとにいくつかの変更があり、各調査次で13～18の場面（質問項目）が調査項目として設定されている。それらのうち、本稿で分析対象とするのは11場面である。この11場面が選ばれたのは、これらが、調査次ごとに若干の変更はあるものの、すべての調査次において共通の質問項目であるとみなすことができ、互いに比較可能であると判断したためである¹。

本稿で扱う11場面の概要を表1に示す。各場面の名称は、岡崎敬語調査でこれまで用いられてきた場面の通称に加えて、【 】内に各場面の大きな状況・特徴を示した。本稿ではこれらを場面の名称として用いる。例えば、「道教え【応答】」のようにして各場面に言及する。これは本文中で場面の概要を捉えやすくするためである。なお、各場面の詳細については、第3次調査で用いられた質問文と刺激図を付録で提示してあるので参照されたい。

表1 岡崎敬語調査 11 場面の概要

番号	場面名	概要	相手
101	道教え【応答】	道を聞かれて教える	旅の人・男性・20-30代
102	振込用紙【依頼】	振込用紙をくれるよう頼む	局員・男性・20-30代
103	荷物預け【依頼】	荷物を預かってくれるよう頼む	店員・男性・20-30代
104	傘忘れ【注意】	傘を忘れたことを注意・指摘する	見知らぬ人・男性・30代
105	先生【応答】	昔の先生の質問に答える	恩師・男性・50代
106	新聞代【依頼】	集金の間違いを確認するよう頼む	集金人・男性・20-30代
107	議事堂【依頼】	道を尋ねる	見知らぬ人・男性・20-30代
108	医者【依頼】	医者に往診を頼む	医者・男性・50代
109	席譲られ【応答】	席を譲られて断る	学生・男性・10代
110	おつり【依頼】	おつりの間違いを確認するよう頼む	店員・女性・30代
111	傘貸し【勧誘】	傘を貸す	知人・男性・20-30代

1.2 先行研究

岡崎敬語調査に関するこれまでの調査報告では、中心テーマとして発話（反応文）の丁寧さ

¹ 過去の調査報告では、本稿で扱う11場面に「物売り／魚釣り」場面を加えた12場面が中心的な場面として扱われてきたが、本稿ではこの「物売り／魚釣り」場面は分析対象から除外した。これは、この場面が第1次調査（物売り）と第2次・第3次調査（魚釣り）で同一の場面とみなすのが難しく、比較不可能であると判断したためである。

に関する分析が行われてきた（国立国語研究所 1957, 1983, Matsuda 2012, 松田他 2012）。特に、Matsuda（2012）および松田他（2012）では、3回の調査結果を比較し、発話の丁寧さの経年変化や話者属性による差異を検討している。そこでの主要な分析結果は以下の4点に要約できる。（1）岡崎敬語調査が実施された過去数十年にわたって、発話の丁寧さが増加傾向にある、（2）丁寧さの年齢差、性差、および学歴差が、調査次が後になるほど小さくなっている、（3）場面ごとの敬語の使い分けの原理に関して、「発話場面が業務上のやりとりか否か」から「発話の話者の自発的なものかどうか」へと基準が変化した、そして、（4）上記の（2）と（3）はいずれも、敬語使い分けの基準が社会的立場の関係から心理的距離の関係へと移行するという「敬語の民主化・平等化」（井上 1999）として説明できる。

1.3 研究課題

上記の先行研究において未解決の問題を指摘するとともに、それらに関連する本研究の課題を明確にしておこう。まず、上記の（1）について、Matsuda（2012）および松田他（2012）では、丁寧さがサンプル全体において増加していることが明らかにされたが、この増加が特定の話者層（例えば高年層、男性、高学歴など）にのみ見られるものなのか、あるいはすべての話者層において丁寧さが同様に増加したのかは明らかにされていない。つまり、話者属性ごとの丁寧さの変化の詳細を検討してはいない。このことは（2）とも関連する。つまり、Matsuda（2012）および松田他（2012）では、話者の生年、性別、学歴の三つの変数を取り上げ、発話の丁寧さに対するこれらの変数の効果が小さくなっている（つまり年齢差や性差が小さくなっている）ことを示しているが、こうした変化がどのような属性の話者層によって引き起こされたかは検討していない。

以上の問題を踏まえ、本稿では、これまでの報告とは異なる新たな分析方法やデータの提示方法を用いて、岡崎敬語調査の発話の丁寧さに関するより詳細な基礎資料を提示する。具体的には、まず、Matsuda（2012）および松田他（2012）で扱われた話者属性に関する三つの変数、すなわち生年、性別、学歴を取り上げ、話者属性による丁寧さの差異と、話者属性ごとの丁寧さの変化を詳細に記述する。また、上記（3）および（4）と関連して、発話場面による丁寧さの違いについても新たな分析を行い、これまでに報告されていない敬語使い分け原理の変化パターンを示す。具体的には、敬語の使い分けにおいて、先行研究で報告されている「発話の話者の自発的なものかどうか」という基準に加えて、「依頼関係の有無」という要因が重要な基準として用いられるようになったという解釈を提案する。そして、こうした敬語使い分け原理の変化は、Matsuda（2012）および松田他（2012）での主張と同様に、「敬語の民主化・平等化」として説明が可能であることを示す。

2. 方法

2.1 資料

岡崎敬語調査の被験者サンプルは、ランダムサンプルとパネルサンプルに分かれる。前者は、調査次ごとに新たに無作為抽出によって選ばれた岡崎市民のサンプルである。後者は、第2次・

第3次調査において、過去の調査（第1次と第2次のいずれかまたは両方）に参加した経験のある継続回答者のサンプルである。このうち、本研究で分析対象とするのはランダムサンプルである。第1次調査のサンプルには、調査時点での年齢が60代の話者が28名含まれていたが、この年代の話者の人数が他の年代に比べて少ないため分析対象から除外した。その結果、分析対象とした被験者数は、第1次が401名、第2次が400名、第3次が306名である。

以上のサンプルのうち、第1次調査のものは、さらに「本グループ」と「比較グループ」に分かれる。これは被調査者への面接調査を実施した調査員の違いによるグループ分けであり、前者の調査員は研究者、後者の調査員は学生である²。本グループをP（properあるいはprofessionalの略）、比較グループをC（controlあるいはcollegeの略）と呼ぶ。第1次サンプルの内訳は、1次Pが231名、1次Cが170名である。

2.2 丁寧さの数量化

発話の丁寧さの尺度として、本稿では「丁寧さの段階付け」を使用する。これは、岡崎敬語調査で用いられてきた丁寧さの尺度であり、各反応文の丁寧さを「1, 2, 3」の3段階で判定したものである。「1」が最も丁寧で、「3」が最もぞんざいである。順にほぼ「ごぞいます体、ですます体、だ体」に相当する。「特別（御）丁寧体、丁寧体、普通体」「最高敬体、敬体、常体」などとも呼ばれる。丁寧さ3段階の判定基準を表2に示す。

表2 3段階方式の丁寧さ段階付けの基準：国立国語研究所（1983:62）より

段階1	(…デ) ゴザイマス、(…シテ) イタダキマス、(…シテ) クダサイマセ、イラシテクダサイ、イラッシュイマセ、のように、大体二つの高い敬語形式の結合から成るもの。およびそれより丁寧な形。
段階2	…デス、…マス、(…シテ) クダサイ、イラッシュイ、のように、「です・ます調」や一つの高い敬語形式から成るもの。
段階3	…ダ、…ヨ、…シテ（依頼）、…シロ、言い捨て（例えば「電報用紙！」）、のように、高い敬語形式がないとみられるもの。およびそれよりさらに乱暴な形。 …シテクレ、…シテモラオウ、のように、簡単な頼む言い方や、オクレ、オイデ、…（シ）ナサイ、のように目下などにしか使わない言語形式。

本稿の分析では、いずれの調査次についても、松田謙次郎氏の判定による段階付けを使用した³（Matsuda 2012）。本稿では、この丁寧さの段階付けが、発話の丁寧さを表す尺度として妥当

² 本稿で取り上げる11場面のうち、101道教え【応答】を除いた10場面では、想定する話し相手は刺激図によって指定されている。一方、道教え【応答】では、想定する話し相手が各調査員である。このため、調査員が研究者か学生か等の属性の違いによって、被調査者の回答が異なる可能性が考えられる。しかし、このことは本稿の分析結果には影響を与えない。本稿では、3.3で場面の違いによる丁寧さの差異を検討するが、そこで扱う要因は被調査者と調査員の関係（社会的立場や年齢の違い）ではなく、場面設定の概要（応答か依頼か等）である。道教え【応答】場面は、被調査者と調査員の関係の違いに関わらず、類似の特徴を持った他の場面（具体的には非依頼場面）と同様に扱うことができる。被調査者と調査員の関係の違いによって、発話の丁寧さがどのように異なるかという問題は、今後の課題となる。

³ 第1次と第2次の調査報告書の丁寧さの段階付けは野元菊雄氏の判定による（国立国語研究所1957, 1983）。本稿で用いる段階付けは、これらの調査報告書の値ではなく、第1次・第2次調査の資料を松田謙次郎氏が再判定したものである。

なものであるという前提のもとで議論を進める。丁寧さ各段階の例を以下に示す。いずれも道教え【応答】場面の例である。

丁寧さ1 「まっすぐ北へ行って頂くと橋がございます」

丁寧さ2 「あの橋が明代橋です」

丁寧さ3 「あの橋が明代橋だ」

2.3 集計・分析方法

3段階で数値化された丁寧さは、変数ごと（例えば場面ごと、性別ごと）に平均し、これを各変数・属性の代表値として検討する。これは、本来は順序尺度である丁寧さの段階を間隔尺度として扱っている点で問題がある。しかし、丁寧さの段階の平均値は、丁寧さの大きな変化傾向や話者属性による差異を検討する上では有効である。実際、過去の岡崎敬語調査の報告でもこうした手法が用いられている（例えば Matsuda 2012）。そこで、本研究でも、その扱いには慎重を期す必要があるが、各属性・変数の丁寧さの代表値として平均値を用いることにする。

本研究での観察・分析は、主に、変数ごとに集計した丁寧さ平均値のグラフの目視による観察に基づく。これを補足する情報として、各変数による丁寧さ平均値への効果を検討した分散分析の結果も提示する。ただし、上述の通り、そもそも丁寧さを間隔尺度として扱うことに問題があるため、この方法は本来有効ではない。岡崎敬語調査の丁寧さデータを分析する際にどのような統計手法を用いるべきかという問題は今後の課題となる。

3. 結果と議論

では、岡崎敬語調査の反応文における丁寧さの変化を見ていこう。以下、発話の丁寧さに影響を与える五つの要因を順に見ていく。3.1では調査次による丁寧さの違いを観察し、丁寧さの経年変化の概要を示す。3.2から3.5では、生年、場面、性別、学歴の順に、各要因による丁寧さの差異と、経年変化パターンの差異を検討する。3.6では、特に重要な交互作用を示した要因である性別と学歴を合わせて検討する。

3.1 調査次

はじめに、丁寧さの大まかな変化傾向を見てみよう。調査次による丁寧さの差異、すなわち丁寧さの経年変化の様子を次頁の図1に示す。縦軸は各調査次における丁寧さの平均値を表す。丁寧なものほど図の上側に位置するように、縦軸の向きを逆にしている（以下、丁寧さを縦軸にとるグラフはすべて同様）。このため、図の上側ほど丁寧さの数値は小さいがより丁寧であり、下側ほど数値は大きいよりぞんざいである（「1」が最も丁寧で「3」が最もぞんざいであることを思い出してほしい）。横軸は調査次を表し、調査次間の間隔は実際の調査年の間隔を反映している（1次Cと1次Pの調査年はどちらも1953年だが、見やすさのために1次Cをずらして1950年に配置した）。第1次と第2次の間隔は19年、第2次と第3次は36年である。

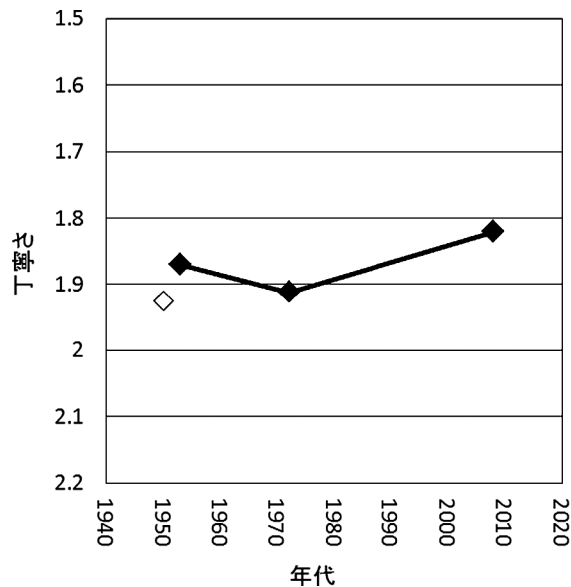


図1 調査次による丁寧さの差異
 (白抜きのプロットは1次Cを表す。
 黒いプロットは左から順に1次P, 2次, 3次を表す。)

図1より、全体として、丁寧さが数十年にわたって増加していることが分かる。第1次から第2次にかけて一時減少するが、1次C（白抜きのプロット）を考慮すると、1次と2次の差は小さくなり、ほぼ同水準と見することもできる。だがいずれにせよ、最も顕著なのは第3次での増加である。1次と2次に比べて、3次では丁寧さが大幅に増えている。丁寧さを従属変数とし、調査次を固定因子とした一元配置分散分析では、調査次の主効果が有意であった ($F(2, 12045)=32.6, p<0.001$)。ボンフェローニ法による多重比較の結果、1次と3次の間と、2次と3次の間には有意差があったが（いずれも $p<0.001$ ）、1次と2次の間に有意差は認められなかった ($p=0.29$)。

次に、丁寧さの3段階を区別して、全体に占める各段階の割合がどう変化したかを詳しく見てみよう。各調査次における丁寧さの3段階の割合を図2に示す。

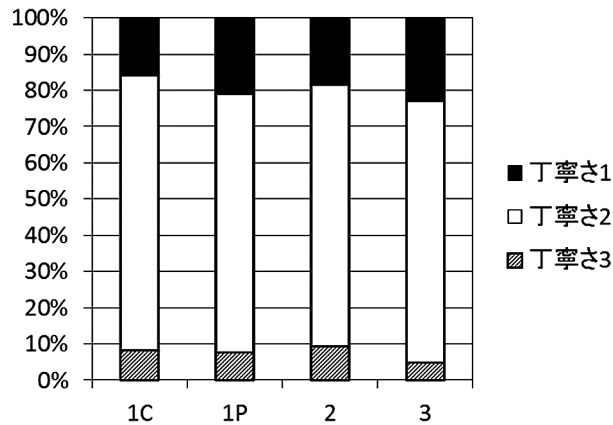


図2 調査次による丁寧さ3段階の割合の変化

図2より、最も丁寧である丁寧さ1の割合がわずかに増加し、最もぞんざいである丁寧さ3の割合がわずかに減少していることが分かる。カイ二乗検定の結果、調査次間での丁寧さ各段階の比率の差が有意であった ($\chi^2=74.6$, $df=4$, $p<0.001$)。図1に示した丁寧さの増加は、各段階の割合が少しずつ変化したことによるものと言えそうである。

3.2 生年（コウホート⁴）

次に、発話者の生年を考慮して、丁寧さの変化をより詳細に見ていこう。図3は、話者の生年ごとの丁寧さを示したものである。横軸は話者の生年を表し、縦軸は各生年における丁寧さの平均値を表す。横軸の生年は10年間隔で集計した。さらに、調査次を区別して異なる曲線に表示した。第1次調査の値はさらにPとCを区別した。その結果4本の曲線が表示され、それぞれ第1次P、第1次C、第2次、第3次の丁寧さを表す。なお、横軸の生年は、各調査時点における話者の年齢に置き換えることができる。すなわち、生年が早い（図の左側）ほど調査時点での年齢が高く、生年が遅い（図の右側）ほど年齢が低い。各プロットが表す年齢は、調査次ごとに以下のようになっている。第1次は、PとCのいずれも、10代（各曲線の右端）から50代（各曲線の左端）までである。第2次と第3次は、10代（各曲線の右端）から70代（各曲線の左端）までである。

⁴ 同一生年集団を表すコウホート (cohort) は、コホート、コーホート等とされることもあるが、本稿では、岡崎敬語調査の報告などで用いられることの多いコウホートとする。

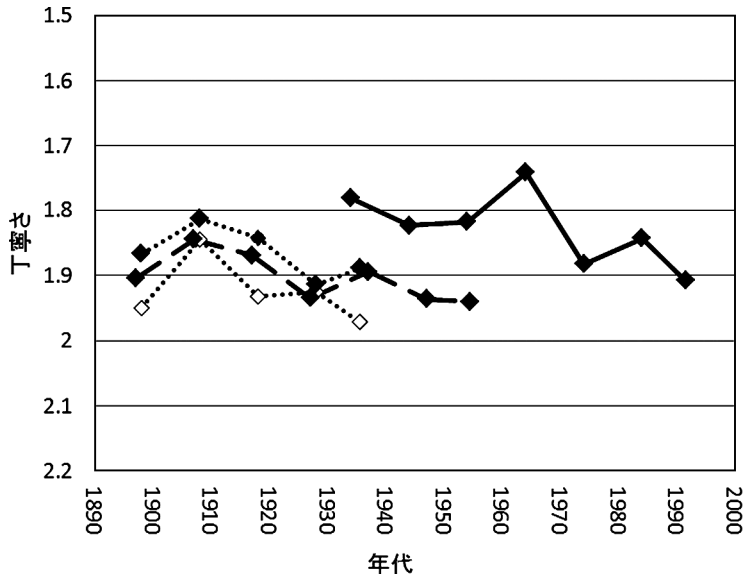


図3 生年による丁寧さの差異
 (点線は1次、破線は2次、実線は3次を表す。
 1次は、白いプロットがC、黒いプロットがPを表す。)

図3からは次の2点が読み取れる。一つは、各調査次において、概ね、生年が早い話者ほど丁寧さが高いこと、もう一つは、同一生年話者の年齢が高くなるほど丁寧さが高くなることである。前者は見かけの時間 (apparent time) の比較、後者は実時間 (real time) の比較から分かる。以下で順に詳しく見ていこう。

まず、生年による丁寧さの違いを調査次ごとに見てみよう。図3では3回の調査次 (第1次はさらにP/C) を区別したが、いずれも概ね同じパターンを示している。すなわち、概ね右下がりの曲線であり、生年が早い話者ほど丁寧さが高く、生年が遅いほど丁寧さが低い。生年を調査時点での年齢と言い換えると、調査時点での年齢が高い話者ほど丁寧で、低い話者ほどぞんざいであると言える。ただし、いずれの調査次においても、グラフの左側の高年層の話者は丁寧さがやや低くなる。丁寧さが最も高くなる年齢は、第1次および第3次調査では40代、第2次調査では60代である。

第1次のPとC、および第2次の3本の曲線は、ほぼ同様のパターンを示すが、丁寧さの高さ (図中の上下位置) にはわずかに差があるように見える。第1次ではCよりもPのほうが丁寧さが高い。つまり、調査員が学生である場合よりも、調査員が研究者である場合のほうが、より丁寧な回答が提示されたわけである。そして、その両者のほぼ中間に第2次の曲線が位置する。第1次のPとCの話者数はほぼ同数であるので、両者を平均すると、第2次との差がそれほど大きくならない。

次に、同一生年話者の丁寧さを調査次間で比較する。すなわちコウホート比較である。1930～1960年に生まれた人たちは、第2次調査では若年層として、第3次調査では高年層として、2度の調査の対象になった。さらに、1930年代生まれの話者は第1次調査にも10代として参加し

ており、3度の調査対象になっている。これらの話者の丁寧さを、同一生年ごとに調査次間で比較することで、特定の生年の話者における丁寧さの実時間変化を読み取ることができる。図3の1930～1960年の範囲を垂直に見ていくと、これらの年代に生まれた話者の丁寧さが、特に第2次から第3次にかけて増加していることが分かる。つまり、特定の生年の話者は、調査の時期が後になり、年齢が高くなるほど丁寧さが増える。個人内の言語形成期以降の習得、すなわち成人後習得・成人後採用 (late adoption) の例と考えることができる (Boberg 2004, 井上 2011, Inoue and Yamashita 2014)。同様の現象は、岡崎敬語調査の回答における「ていただく」の使用や、文の長さ (字数) についても認められている (井上他 2012)。

3.3 場面 (質問項目)

ここでは丁寧さと場面 (質問項目) の関係を見てみよう。丁寧さの場面差、すなわち丁寧さがどの場面で高く、どの場面で低いかを調べることで、敬語の使い分け原理が分かる。つまり、どのような要因で敬語の使い分けが左右されるかが分かる。そして、丁寧さの場面差の経年変化を調べることで、敬語の使い分け原理がどのように変化してきたかが分かる。

まず、場面による丁寧さの違いを大まかに把握しよう。図4は、縦軸に丁寧さ、横軸に調査次を取り、丁寧さの経年変化を場面ごとに表示したものである。第1次の丁寧さは、煩雑になるのを避けるためにCを除いて、Pの平均値のみを表示した (同様に第1次のPとCを区別していない図5についても、第1次はPのみの値である)。

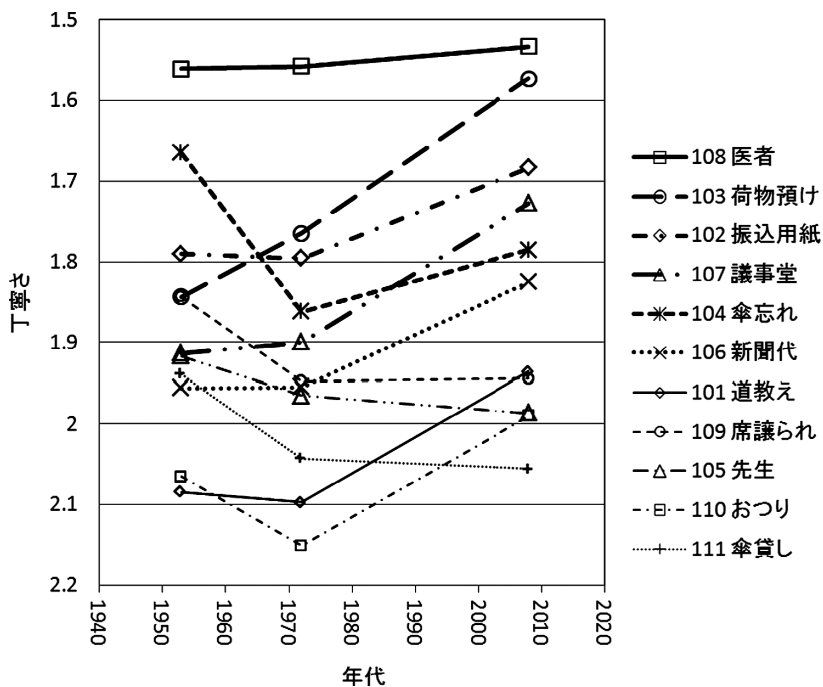


図4 丁寧さの場面による差異と場面ごとの経年変化

図4を見ると、場面によって丁寧さが異なることが分かる。医者【依頼】場面の丁寧さが3回の調査を通して最も高い。丁寧さが低いのは、道教え【応答】、おつり【依頼】、傘貸し【勧誘】等である。また、丁寧さが増加する場面と減少する場面があることも分かる。つまり丁寧さの経年変化パターンが場面によって異なる。丁寧さの増加を示す場面が多いが、特に荷物預け【依頼】や議事堂【依頼】などの場面での増加が目立つ。丁寧さが減少するのは先生【応答】や傘貸し【勧誘】等の場面である。敬語の使い分け原理、敬語使い分けに関わる要因が変化したことが窺える。

丁寧さを従属変数とし、調査次と場面を固定因子とした二元配置分散分析では、場面の主効果が有意であった ($F(10, 12015)=111.5, p<0.001$)。また、調査次と場面の交互作用も有意であった ($F(20, 12015)=6.3, p<0.001$)。このことから、丁寧さに対する場面の効果が調査次によって異なること、つまり、場面による敬語使い分けのパターンが調査次によって異なることが示唆される。

では、場面による丁寧さの違いとその変化をより詳細に見ていこう。全場面を通じた丁寧さ全体についても、場面ごとの丁寧さについても、第1次調査と第2次調査の間には大きな変化はなかった。一方、第3次調査では、それまでの調査結果と比べて大きな変化があった。そこで、第1次と第3次の間で場面ごとの丁寧さを比べることにする。図5は、場面ごとに、第1次(Pのみ)と第3次の丁寧さを比較したものである。横軸が第1次調査、縦軸が第3次調査のそれぞれの丁寧さを表す。丁寧さが高い場面ほど右上に、低い場面ほど左下に配置されるように軸の向きを逆にしている。図中の横方向の配置は第1次調査の丁寧さの違いを表す。縦方向は第3次調査の丁寧さの違いを表す。図の目盛は、単純な「ですます体」に相当する丁寧さ「2」の線のみ表示した。この線より右または上はより丁寧な言い方、左または下はよりぞんざいな言い方である。対角線上で両軸の丁寧さが等しくなり、当該場面に関して第1次から第3次にかけて丁寧さの変化がなかったことを表す(ただし実際にはこうした場面は無い)。各場面の布置が対角線から離れるほど、第1次から第3次にかけて丁寧さが増加したことを表す。対角線の左上に布置された場面は丁寧さが増加した場面、右下は減少した場面である。

図5より、第3次調査にかけて丁寧さが増加したのは、医者【依頼】、振込用紙【依頼】、荷物預け【依頼】、議事堂【依頼】、新聞代【依頼】、おつり【依頼】、道教え【応答】の7場面であり、減少したのは傘忘れ【注意】、席譲られ【応答】、先生【応答】、傘貸し【勧誘】の4場面である。どのような場面で丁寧さが増加したかを見てみると、丁寧さが増加した場面には「相手に依頼する場面」が多い。これに対し、丁寧さが減少した場面には、依頼を行う場面は含まれない。以下で詳しく見ていこう。

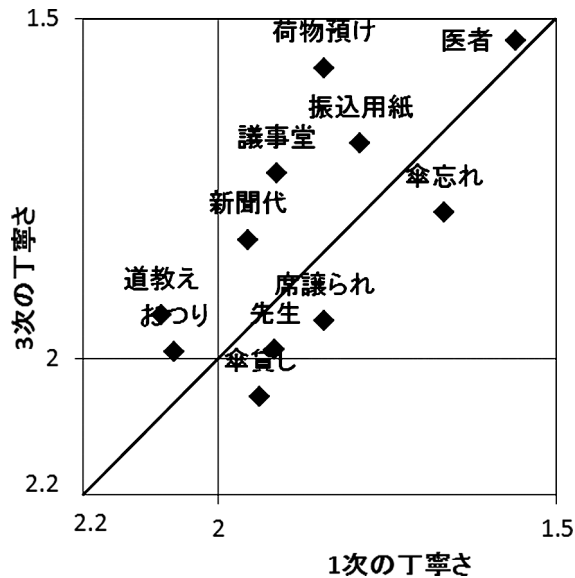


図5 第1次調査から第3次調査への場面ごとの丁寧さの変化

11の場面のうちのいくつかは、被調査者が依頼行為を行う場面として設定されている。つまり、こうした場面では、基本的にすべての被調査者が依頼表現を用いて回答することが期待される。そして実際に、こうした場面ではほぼすべての話者が依頼表現を使い、そうでない場面に比べて依頼表現の使用頻度が高くなっている。11場面のうちこうした依頼場面に該当するのは、医者【依頼】、振込用紙【依頼】、荷物預け【依頼】、議事堂【依頼】、新聞代【依頼】の五つである。これを踏まえて再び図5を見ると、五つの依頼場面のすべてにおいて、第1次から第3次にかけて丁寧さが増加したことが分かる。丁寧さが増加した7場面の中で、5場面が依頼場面である。その結果、図5の縦方向の場面配置から第3次の丁寧さの順位を見ると、丁寧さの高い上位6場面のうち、依頼表現の使用頻度が低い場面は傘忘れ【注意】のみである。傘忘れ【注意】を除いた残りの5場面が依頼場面である。つまり、依頼場面の丁寧さが増加し、第3次では依頼場面の丁寧さが高くなったと言える。このことから、「相手に依頼する」という依頼関係の有無が、敬語の使い分けを左右する基準として重要になったと考えられる。

こうした変化は、「敬語の民主化・平等化」の現れとして捉えることができる（井上1999）。すなわち、敬語使い分けの原理における重要な基準が、話者間の身分・階層関係（社会的な力関係、上下関係）から、心理的關係（親疎関係、心理的距離、心理的優劣関係）へと移行するという変化である。依頼関係の有無というのは、話者間の心理的優劣関係に関わると考えられる要因である。つまり、依頼する側の心理的立場が低く、依頼される側が優位に立つと考えられる。このため、第3次調査における依頼場面の丁寧さの増加は、敬語使い分けの原理において個人間の心理的關係の比重が高くなったものと解釈できる。つまり、敬語の民主化・平等化という、より大きな敬語変化の中に位置付けて解釈できる。

3.4 性別

次に、性別による丁寧さの差異と、各性別における丁寧さの経年変化を見る。男女それぞれについて、調査次による丁寧さの変化を図6に示す。図1のデータを、性別を分けて表示したものである。

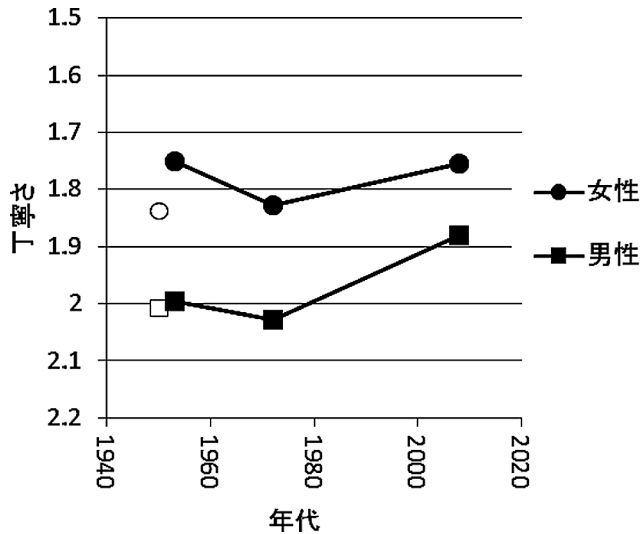


図6 調査次による性別ごとの丁寧さの変化
(白抜きのプロットは1次Cを表す。
黒いプロットは左から順に1次P, 2次, 3次を表す。)

図6から以下のことが読み取れる。まず、すべての調査次において丁寧さは性別によって異なり、一貫して女性のほうが高い。調査次と性別を独立変数とした分散分析の結果、丁寧さに対する性別の主効果が有意であった ($F(1, 12042)=382.1, p<0.001$)。また、男女ともに、図1に示した全体の経年変化と類似した変化パターンを示す。すなわち、丁寧さが第1次調査から第2次調査にかけて一旦減少し、第3次調査では増加する。

一方で、性別による変化パターンの違いも読み取れる。第2次から第3次にかけての丁寧さの増加の幅は、男性のほうが女性よりも大きい(男性約0.15, 女性約0.07)。その結果、第3次における丁寧さの男女差はそれまでに比べて縮まっている(男女の差は、2次では約0.2, 3次では約0.13)。実際、上記の分散分析では、調査次と性別の交互作用が有意であった ($F(2, 12042)=8.4, p<0.001$)

これと関連して、男性の丁寧さは全体として(第1次から第3次にかけて)大幅に増えたものの、女性の丁寧さは第1次と第3次でほぼ同じ水準であり、全体としては増加していないと見ることができる(1次Cを考慮すれば増加したと言えるが、それでも依然としてその増加幅は男性より小さい)。したがって、全体の(図1に示した男女合計の)丁寧さの増加は、男性の丁寧さが増加したことによるものと考えられる。言い換えると、女性の話し方は以前から丁寧

で、大きく変化していない。男性はぞんざいな人が以前は多かったが、丁寧話す人が増えた。その結果、男女を合わせた全体として、丁寧さが上がったという解釈である。女性の丁寧さは、変化があったと見るにしても、その増加幅は男性よりも小さいことから、全体としての丁寧さの増加に対する寄与度は男性のほうが高いと言えそうである。

3.5 学歴

次に丁寧さと学歴の関係を見てみよう。学歴を低、中、高学歴の3段階に分けて検討する。この3段階は、現在の中卒以下、高卒、大卒にそれぞれ相当する。図7に学歴水準ごとの丁寧さの変化を示す。図1のデータを、各学歴段階に分けて表示したものである。

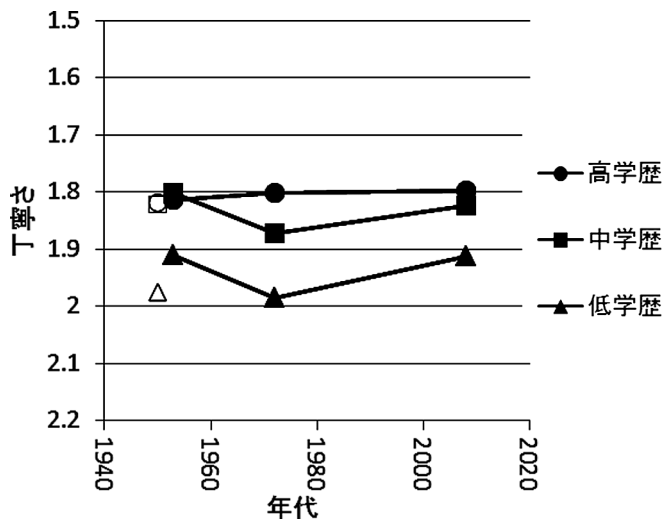


図7 調査次による学歴ごとの丁寧さの変化
(白抜きのプロットは1次Cを表す。
黒いプロットは左から順に1次P, 2次, 3次を表す。)

図7から分かるのは、まず、概ね学歴が高いほど丁寧さが高いということである。中・高学歴に比べると、低学歴の丁寧さは一貫して低い。中学歴と高学歴を比べると、第1次では中学歴のほうがわずかに高く、第3次でも両者の差は小さいものの、全体としては、高学歴のほうがより丁寧であると言えそうである。丁寧さを従属変数とし、調査次と学歴を固定因子とした二元配置分散分析では、学歴の主効果が有意であった ($F(2, 11976)=53.6, p<0.001$)

また、学歴による差異は、丁寧さの水準そのものだけでなく、丁寧さの経年変化パターンにもあることが図7から分かる。低学歴と中学歴は互いに類似したパターンを示す。丁寧さが第2次調査で一旦減少し、第3次で増加する。これは、図1で見た、全学歴を含めた全体のパターンと同様である。これに対し高学歴では、第2次での減少が見られず、全体としてわずかに増加するもののグラフはほぼ平坦である。つまり高学歴では丁寧さはほとんど変化しない。

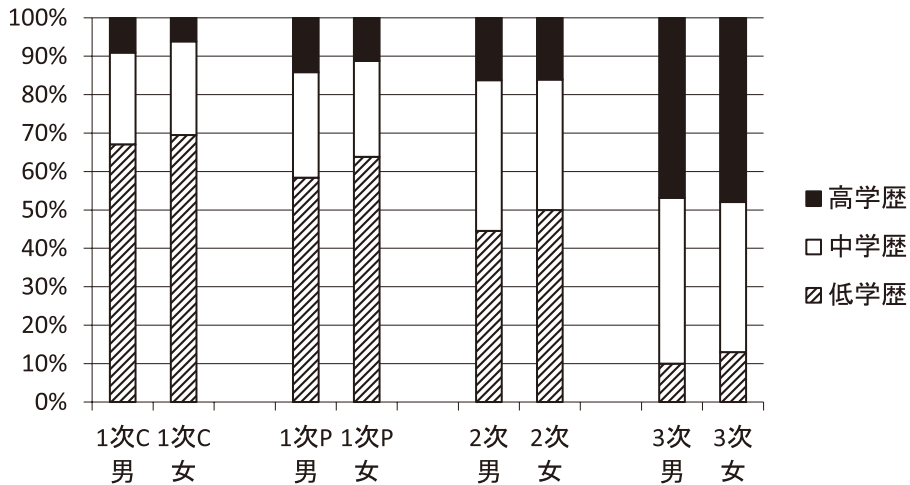
以上のように、丁寧さの増減のパターンには、低・中学歴と高学歴の間で差異が認められる。

一方で、丁寧さの増減自体（最終的に増えたか減ったか）を見ると、すべての学歴水準に共通する点も読み取れる。すなわち、いずれの学歴水準においても、丁寧さはほとんど変化していないのである。高学歴の丁寧さの増加幅が小さいことは上述の通りだが、低・中学歴に関しても、確かに第3次調査で増加するものの、第3次の丁寧さは第1次のそれと同程度である。中学歴ではむしろ第3次調査の丁寧さのほうがわずかに低い。つまり、中学歴では第1次から第3次にかけて丁寧さはわずかに減少している。このように、学歴水準ごとに見ると、途中での増減はあるものの、結果として丁寧さはほとんど変化していない。

以上の観察は、3.1 で見た全体としての（全学歴を合計した）丁寧さの増加と一見両立しない。どうということかと言うと、全体として丁寧さが増加したのなら、学歴水準ごとに見ても丁寧さが同様に増加するか、あるいは少なくとも一部の学歴層では丁寧さが増加し、全体の増加を牽引したと考えるのが自然である。だが実際には、どの学歴水準においても丁寧さは大きく増えてはいない。したがって、全体の丁寧さの増加がどのようにして生じたかが分からなくなる。言うなれば、部分は増えていないように見えるのに、全体としては増えているのである。こうした状況に関わる要因として、以下で見るように、「学歴構成比」の変化が挙げられる。

岡崎敬語調査の第1次調査が行われた1953年と第3次調査が行われた2008年では、社会構造が大きく異なっており、それに伴い、人口構成にも大きな変化が生じたと考えられる。すなわち、年齢や学歴などの話者属性の構成比の変化である。実際、岡崎敬語調査の被験者サンプルにおいても、「学歴構成比」が3回の調査で大きく異なる。上述の学歴の3分類に基づく学歴構成比の変化を次頁の図8に示す。（図では男性と女性を分けて表示してあるが、この点については後述する。）

低学歴の話者は、第1次調査の時点では全体の約60～70%を占めていたが、第3次では約10%まで減っている。一方、高学歴の話者は、第1次では約10%、第2次では約15%であったのに対し、第3次では約50%まで増えている。つまり、低学歴の話者が減り、高学歴の話者が増えている。「高学歴化」が進んだと言える。1次Cを除いて学歴×調査次のカイ二乗検定を行ったところ、有意な結果が得られた（ $\chi^2=2664.4, df=4, p<0.001$ ）。

図8 男女別、調査次による学歴構成比の変化⁵

こうした人口構成の変化が、発話の丁寧さの変化とどのように関わるのであろうか？ 上述の通り、各学歴水準における丁寧さは増えていないものの、全学歴を合計した全体の丁寧さは増えていた。この事実は、「高学歴化に伴う丁寧さの増加」として説明が可能である。学歴が高い話者ほど概ね丁寧さが高いという図7で見た事実を思い出ししてほしい。これと、図8の学歴構成比の変化を合わせて考えてみよう。すると、学歴の高い話者の割合が増えると、丁寧さの高い話者の割合が増えるということになる。つまり、学歴ごとの丁寧さに変化が無くても、高学歴化によって全体の丁寧さは増加するのである。このように、岡崎敬語調査の回答における発話の丁寧さの増加は、非言語要因としての社会構成の変化によるものとして理解することができる。

ただし、以上の解釈は、岡崎敬語調査の丁寧さの変化のすべてを説明してはいない。というより、以上のような解釈から新たな疑問が生じる。丁寧さの増加が高学歴化によって生じるのなら、性別ごとに見ても、男女ともに丁寧さが増加することが期待される。さらに、図8では高学歴化の程度に大きな男女差は見受けられないので、男性と女性の丁寧さがほぼ同様の変化を示すことが期待される。しかし、実際には、3.4で見たように丁寧さの変化の様相は話者の性別によって異なる。男性の丁寧さは増えたのに対し、女性の丁寧さはほとんど増えていない。この男女差は、単に高学歴化による増加だけでは説明できない。これは、高学歴化の効果が男女で異なるためであるかもしれない。あるいは、高学歴化とは別の要因が丁寧さの変化に関わっていて、その効果が男女で異なる可能性も考えられる。いずれにせよ、学歴による丁寧さの差異は、男性と女性のそれぞれについて検討する必要がある。つまり「性別と学歴の交互作用」である。

⁵ 岡崎市全体の実際の学歴構成比ではなく、岡崎敬語調査の被験者サンプルのみを対象としたものである。とはいえ、少なからず、実際の人口構成の変化を反映したものと推測される。

3.6 性別×学歴

では、男性と女性のそれぞれについて、学歴による丁寧さの差異とその変化を見てみよう。図9は、図7に示した学歴ごとの丁寧さの変化を、さらに性別で分けたものである。

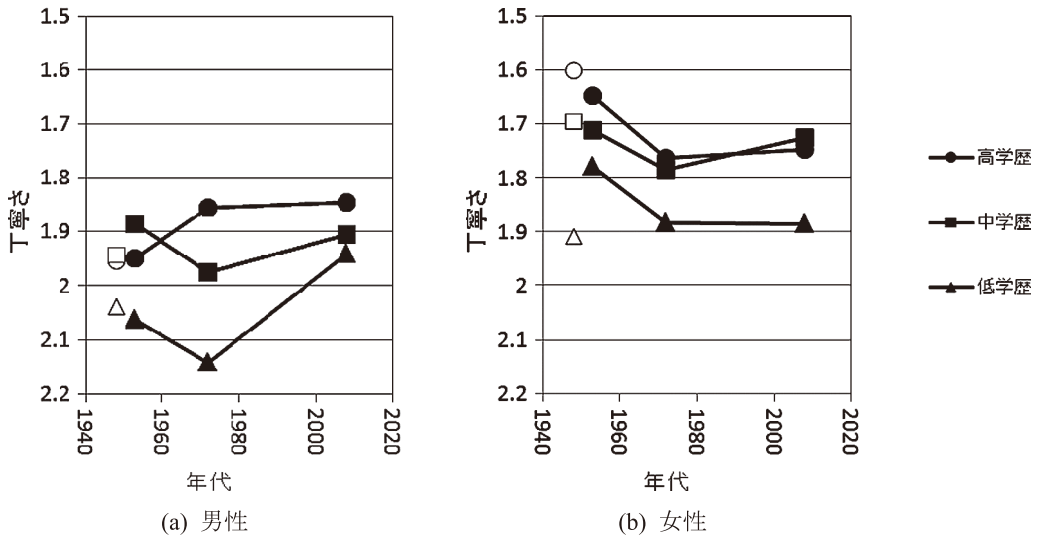


図9 男女別、調査次による学歴ごとの丁寧さの変化
(白抜きのプロットは1次Cを表す。
黒いプロットは左から順に1次P, 2次, 3次を表す。)

図9の(a)男性と(b)女性を比較すると、学歴ごとの丁寧さ変化のパターンが男女で異なることが読み取れる。特に、低学歴と高学歴での違いが顕著である。すなわち、低・高学歴の話者の丁寧さは、男性では増加し、女性では減少する(ただし1次Cを考慮すると、女性の低学歴の減少幅は小さくなる)。これらに比べると、中学歴は男女いずれも変化幅が小さい(女性の中学歴はわずかではあるが減少する)。

以上の観察結果と、3.4と3.5のそれぞれで見た性別ごとおよび学歴ごとの丁寧さの変化を合わせて考えると、これらの話者属性と丁寧さがどのように関わっているかが分かってくる。そして、3.5の最後で述べた「高学歴化」と「性別差」の関係についての問題に対し、以下のような説明を与えることができる。まず、図9より、学歴水準ごとの丁寧さは、男性では増加(低・高学歴)あるいは変化無し(中学歴)、女性では減少(低・高学歴)あるいは変化無し(中学歴)である。これだけを見ると、男性全体の丁寧さは増加し、女性全体の丁寧さは減少することが期待される。しかし、これに3.5で見た学歴構成比の変化すなわち高学歴化による効果が加わり、男女いずれも丁寧さが増える。したがって、男性では、「学歴水準ごとの増加」に「高学歴化による増加」が加わり、全体として丁寧さが増加する。一方、女性では、「学歴水準ごとの減少」に「高学歴化による増加」が加わり、これらの効果が互いに打ち消し合うかたちとなる。つまり、「高学歴化による増加」の効果そのものには男女差が無かったとしても、その効果の見かけ上の大きさは女性のほうが小さくなるのである。このため、全体としては、3.4で見た変化パターンとなる。

すなわち、男性の丁寧さは増加したのに対し、女性の丁寧さはほぼ変化していない。

4. 結論

本稿では、岡崎敬語調査の反応文資料を分析し、発話の丁寧さの経年変化と、それに関わる話者の社会的属性などの変数について検討した。まず、岡崎敬語調査の回答における発話の丁寧さが、半世紀以上の期間にわたって増加傾向にあることを示した。そしてその変化を、生年、性別、学歴という話者属性ごとに検討した。その結果、全体の丁寧さの増加を引き起こすのは、主に男性の丁寧さの増加と高学歴化であることを示した。つまり、性別について言うと、女性の丁寧さに大きな変化は無いのに対し、男性の丁寧さは大幅に増加した。学歴については、特定の学歴において丁寧さが増加したのではなく、丁寧さの高い高学歴話者の割合の増加によって、全体の丁寧さが増加した。

また、発話者の社会的属性によって丁寧さが異なることも示した。すなわち、概ねどの時代においても、発話の丁寧さが高いのは、高年層、女性、高学歴の話者である。

さらに、発話場面による丁寧さの違いを分析し、敬語の使い分け原理において「依頼関係があるかどうか」が重要な基準になってきていると解釈した。そして、この変化を、敬語の民主化・平等化の現れとして、長期間にわたる日本語の敬語の歴史的変化における現代的一局面と位置付けた。

最後に、残された課題について述べる。本研究では、発話の丁寧さを3段階で数値化して、その平均値を分析した。しかし、2.3ですでに述べた通り、こうした方法は大きな傾向・パターンを探る上では確かに有効であるものの、丁寧さ3段階を連続的な間隔尺度として扱うのは問題がある。今後は、数量化された発話の丁寧さをどのように扱い、いかなる統計手法を用いて分析するのが有効であるかを考える必要がある。Matsuda (2012) では、丁寧さの段階付けデータに主成分分析を適用している。また、これに加えて、対応分析を適用するのが有効であるという見通しを現時点では持っている。

上記の問題は、丁寧さ3段階の「間隔」に関する問題であった。すなわち丁寧さ1と2の間隔と、丁寧さ2と3の間隔が同じかどうかという問題である。一方で、丁寧さ各段階を均質のものとして扱ってよいかどうかという問題もある。当然のことながら、例えば同じ丁寧さ1の段階と判定される発話には、多様な語形が含まれる。つまり、丁寧さの各段階には、詳細に検討すれば丁寧さの異なる発話が含まれる。この問題については、語形ごとの使用数の変化を個別に検討する必要があると考えている。例えば、「です」の使用数の変化、「ございます」の使用数の変化などである。実際、こうした分析が現在進行中である（井上 2014）。

参考文献

- Boberg, Charles (2004) Real and apparent time in language change: Late adoption of changes in Montreal English. *American Speech* 79(3): 250-269.
- 井上史雄 (1999) 『敬語はこわくない』東京：講談社。
- 井上史雄 (2011) 『経済言語学論考一言語・方言・敬語の値打ち一』東京：明治書院。
- 井上史雄 (2014) 『岡崎の「ですます」と「ございます」』大規模経年調査資料集 9 (私家版資料集)。
- 井上史雄・金順任・松田謙次郎 (2012) 「岡崎 100 年間の「ていただく」増加傾向—受惠表現にみる敬語の民主化—」『国立国語研究所論集』4: 1-25.
- Inoue, Fumio & Akemi Yamashita (2014) Change in the use of beautifying “o-” and late adoption—A historical interpretation of data one decade apart. *Proceedings of METHODS 14 London Aug 2011*.
- 国立国語研究所 (1957) 『敬語と敬語意識』東京：秀英出版。
- 国立国語研究所 (1983) 『敬語と敬語意識—岡崎における 20 年前との比較』東京：三省堂。
- 国立国語研究所 (2010) 『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』科学研究費補助金研究成果報告書 第 1 ~ 4 分冊。
- Matsuda, Kenjiro (2012) What happened to the honorifics in a local Japanese dialect in 55 years: A report from the Okazaki Survey on Honorifics. *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 18(2): 49-57.
- 松田謙次郎・阿部貴人・辻加代子・西尾純二 (2012) 「岡崎敬語調査報告—継続サンプルの分析—」『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』37-54.

【付録】

岡崎敬語調査 敬語行動項目の 11 場面の質問文と刺激図：国立国語研究所 (2010 (第 2 分冊) : 38-47) より

101 道教え	わたしのような旅行で来たものが、東岡崎駅の北口で、明代橋(みょうだいばし)はどちらかということをおあなたにたずねました。何と言って教えますか。
102 振込用紙	あなたが振込をしなればならなかったとします。郵便局で振込用紙をもらうのに、この人に、何と言って頼みますか。
103 荷物預け	これはあなたの買いつけの店です。この店で買物をしましたが、ちょっとよそへ廻るので、この荷物をあずかっておいてもらう場合、店のこの人に、何と言って頼みますか。
104 傘忘れ	あなたがバスに乗っていると、この人がかさを忘れて降りていきかけました。この人は、あなたの知らない人です。何と言って、この人にかさを忘れたことを注意しますか。
105 先生	この子はあなたのお宅のお子さん(弟さん、お孫さん etc)です。このお子さんをつれて歩いていると、この人に会いました。この人は、昔あなたが小学校で習った先生です。先生に、「この子は？」とお子さんのことを聞かれたら、何と答えますか。
106 新聞代	この人は新聞代の集金人です。この人が先月の料金を取りに来ました。ところが、先月の分はもう払ってあるので、受け取りを見せながら、もう一度調べるように頼むのには、何と言いますか。
107 議事堂	ここは東京の町角です。あなたは国会議事堂を見物しようと思っているのですが、道がわかりません。そこで、こういう通りがかりの人に議事堂に行く道をたずねる場合、何と言って聞きますか。
108 医者	あなたの家の近所の人が急病になりました。あなたが頼まれて、近所のお医者さんの家に行くと、お医者さんが玄関へ出て来ました。この近所のお医者さんに、すぐ来てもらうのには何と言って頼みますか。
109 席譲られ	この子はあなたのお宅のお子さん(妹さん、お孫さん etc)です。このお子さんとバスに乗っていると、この学生が席をゆずってくれようとしてきました。ところが、あなたはすぐ次で降りるので、断るとします。そのとき、何と言いますか。
110 おつり	この店はあなたの買いつけの店です。この店で買いものをして、おつりをもらったら、おつりが足りません。あなたは何と言いますか。
111 傘貸し	にわか雨が降ってきました。家の前を、少し知っているこういう人がぬれて歩いています。気の毒なので、この人におあなたのお家のかさを貸すとしたら、あなたは何と言いますか。

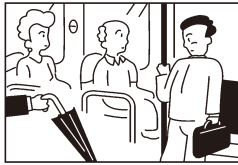
101 道教えは刺激図無し



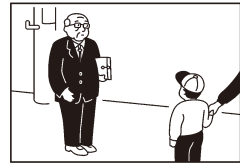
102 振込用紙



103 荷物預け



104 傘忘れ



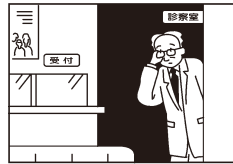
105 先生



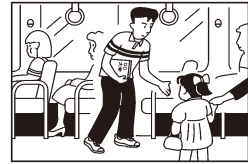
106 新聞代



107 議事堂



108 医者



109 席譲られ



110 おつり



111 傘貸し

Changes in the Politeness Level of Utterances and Social Factors: A Report from the Okazaki Survey on Honorifics

YANAGIMURA Yu

Adjunct Researcher, Department of Language Change and Variation, NINJAL

Abstract

This paper reports a temporal change in the politeness level of utterances using data from the Okazaki Survey on Honorifics (OSH). It is shown that the politeness level of utterances has increased over the past decades, in particular since the second survey in 1972. Those who were born in the 1940s, having participated in the survey three times, increased their politeness level. This indicates that speakers modify the politeness level of the honorifics they use during their life course and demonstrate a case of late adoption. Moreover, older speakers have the tendency to use more polite forms than younger speakers do.

Regarding the factors controlling the use of honorifics, it seems that speakers have been shifting the relative importance of power to solidarity in deciding how polite they should be in a particular situation.

With regard to the social characteristics of speakers, this paper observes that females are more polite in their use of honorifics than males are, and speakers with high academic backgrounds are more polite than those with low academic backgrounds are. Furthermore, the temporal change in the politeness level also depends on the following social variables: an increase in the politeness level is caused mainly by male speakers and an increased ratio of highly educated speakers, who use more polite forms of honorifics.

Key words: honorifics, politeness, language change, social variable of speaker, situation